

まえがき

『現代語から古語を引く辞典』の旧版『古語類語辞典』を出版したのは平成七年です。その出版直後から改訂・増補を思い立ち、それを出発点として今日まで二十年間作業を続けてきました。初めは五年ほどと思っていたのに、次第に改訂の域を越えて大掛かりな再構築・再編集の作業となり、予想外の長年月を要しました。結果、旧版の改訂版ということではなく、約二万一千三百の見出し語によって延べ三十二万四千の類語が検索できる大きな辞典となりました。

類語として収録された言葉は、古事記・万葉集の時代から近・現代に至るまで全ての時代にわたっており、さらに「上代」「中古」などの記号を付けて時代順に並んでいます。数十万の類語を集めた類語辞典は今までにあったかも知れません。しかし、現代語だけでなく古い大和言葉まで、しかも時代別に調べるというのができるという辞典はかつて刊行されたことがありません。その意味でこの辞典は、日本語文化の新たな時代を拓く画期的な辞典であり、日本の国語辞典の歴史に名を留める辞典であると自負しています。

この辞典は、古語・現代語を幅広く（どちらかと言えば古語に重点を置いて）、また、大和言葉・漢語・カタカナ語を偏りなく、できるだけ多くの類語を集めることを目標に編集しました。類語総数延べ三十数万も他に誇れる多さだと思えますが、それよりも基本的な言葉について関連語を多数集めていることも自慢です。表紙の見返しに「雨」「風」の類語を列挙していますが、これは本文の約三分の一程度を抜き出したものです。本文には、「雨」に三五七語、「風」には四九八語の類語・関連語が収録されています。それらを見ると、自然の風物に対する日本人の豊かな情操を知ることができます。また、一番多いのは「死ぬ」で、約六六〇語あります。「月」などにも多くの類語が集まっていますが、これら類語・関連語の多い基本的な言葉から、日本民族が古来何に強く興味・関心を持ち続けてきたかを読み取ることができます。

歌人窪田空穂は『短歌雜誌』（大正八年六月号）に、「如何なる古語であつても又如何なる性質の詞でも、作者が自分の実感を現すに適當な詞だとして用ゐたもの」は「現代語と云はるべきもの」と書いています。この辞典の半分以上を占める古語は決して死語ではありません。民族の歴史の中に生きてきたこれら多くの言葉は、必ずや現代語として人々の言語生活を豊かにするはずで、また、古代から現代までの三十数万の言葉が時代順に並んでいるこの辞典は、日本語の歴史を俯瞰するものでもあります。広々と広がる豊かな日本語の世界を眺望しながら、この辞典が好評を以て世に迎えられることを期待しています。

出版に際して三省堂 国語辞書第一編集室の吉村三恵子さん、木下朗さんのお二人には一方ならぬお世話になりました。記して深く感謝の意を表します。

平成二十七年五月

芹生公男

凡例

一、編集方針と特色

この辞典は、現代語の見出しによって同意語・類義語・関連語等を探し出すため、またその手掛かりを提供するため、次のような特色を持つ類語辞典として編集した。

- ① 古事記・万葉集の時代から現代まで、かつて日本語として使われた古語、また今も使われている現代語を、偏りなく収録した。
- ② 和語・漢語・外来語・格言・俚諺・動植物の異名等、各種の言葉を、幅広く収録した。
- ③ 収録された言葉には、それぞれその使われた時代を注記した。

収録語数をできるだけ多くするため、収録された類語の説明は最小限にとどめた。一般の国語辞典・古語辞典を傍らに置いて、必要に応じて参照しながら利用することを想定している。

二、見出し語

見出し語は約二万一千三百語。五十音順で配列した。

子見出しは約四万九千三百。親見出しと共通する部分を「一」で示した。配列は、「一」が一字目にあるものを先にし、二字目以降にある子見出しは後にして、それぞれ五十音順とした。但し、具体例を示す「一」のいろいろ(例)の項は後へまわした。

子見出しのうち、関連語は約千五百。「▼」を以て示し、「一」を含む子見出しの後へ五十音順で続けた。

なお、子見出しのうち、日付や数量など、数を含むものが続くところでは、数による配列としたところがある。また、春夏秋冬など、特別な順序で配列したところもある。さらに、「古語の願望表現」のように特別な子見出しを作ったり、一覧表化したりして、具体例を集めた項目もある。

編集のために利用した文献は後にすべてを挙げるが、基礎作業のために主として用いたのは次の辞典である。

- ① 『福武古語辞典』初版 井上宗雄ほか編 福武書店 一九八八年刊 三万七千語
- ② 『大辞林』第二版 松村明編 三省堂 一九九五年刊 二十三万三千語

編集作業はすべてパソコンで行った。使用したソフトは、次の二つである。

データベース Microsoft Office Access
日本語ワープロソフト「一太郎2012 承」

但し、以下の説明は、パソコンを使わずに手作業で行ったような書き方になっている。

1 見出し語の作成

①カード作成

右の二辞典の見出し語を一枚一枚カードにした。但し、次の語は原則として省いた。

- (a) 固有名詞(人名・地名等)
- (b) 科学・芸術・スポーツなどの専門用語
- (c) 助詞・助動詞
- (d) 「楽しげ」「楽しさ」などの派生語

② キーワードの書き込み

一枚一枚のカードに、そのカードを検索できるキーワードを書き込んだ。例えば、「しらかべ【白壁】」のキーワードは、「しろい【白】」と「かべ【壁】」。それらはのち、「【い壁】「白い」」などの子見出しとなって、「しらかべ【白壁】」を類語として取り入れることになる。また、「うまい【旨／甘／美味】」のように複数の意味がある場合、その数だけカードを増やした。

③ 見出し語の作成

カードをキーワードによって五十音順に並べ替え、さらに他の参考文献(歳時記・ことわざ辞典など)でカードを増補しながら、親見出し・子見出し・関連語などに仕分けて立項した。

以上のように、この辞典は一般の辞典の見出し語と語釈を逆転させて作ったものである。「しろい【白】」というキーワードのカードが二十枚集まれば、「しろい【白】」という見出しに二十の類語が集まったということである。逆に言えば、これらの類語は他の辞典では見出し語であり、その語釈に「白い」という言葉が使っていることである。「がっき【楽器】」の子見出しに「その他弦楽器のいろいろ」という子見出しがあって、多くの弦楽器が例として挙がっている。これらの楽器は編者が思いついたものを列挙したのではなく、他の辞典で見出し語になっている楽器という意味である。「剛毅」と「剛気」のように似たような言葉には似たような類語が集まるが、その集まり方に多少のずれがあるのは国語辞典の語釈のずれと見てよい。編者が意図的に調整した部分もあるが、それはごく一部である。

2 見出し語の表記

(a) 平仮名で見出し語を示し、【 】の中に漢字表記を示した。

(b) 見出しの漢字表記は原則一つとした。例えば、「ちえ【知恵／智慧】」は、「ちえ【知恵】」とし、同じ語を類語本文のなかに再掲しているので、そちらを「ちえ【知恵／智慧】」とした。

(c) 欧米からの外来語は片仮名で示し、もともなった語のスペリングをローマ字で付記した。英語以外からのものには、原語名も記した(外来語の表記については、後記する類語についての解説も参照のこと)。

(d) 活用語は終止形で示し、語幹と語尾の間に「・」を入れた。語幹と語尾が区別できない語は、最初の一字の下に「・」を入れた。形容動詞は語幹のみ示したが、子見出しでは「・」を入れた。

(e) 名詞から派生したサ変動詞で二字以上の漢語は「する」を付けない。一字の場合、「あい・する【愛】」「おく・する【臆】」のように「する」を付けた。

(f) 見出し語に複数の意味がある場合、①②③…で区別し、それぞれにへ～を付けて意味の区別を記した上で類語を集めた。

(g) 子見出しは「―」を以て示した。「―」は親見出しの共通する部分を示す。活用語は語幹を示しているが、語幹と語尾を分けられない語は最初の一字を「―」とした。従って、一般の辞典では、

にる【似】

似たりよったり

2 類語の時代区分

この辞典の大きな特色として、収録された類語すべてにその使われた時代を注記している。その時代区分と記号は次のとおりである。

現代(1945～) 〓 (無記号)
近代(1868～1944) 〓 近代
近世(1603～1867) 〓 近世
中世(1192～1602) 〓 中世
中古(794～1191) 〓 中古
上代(～793) 〓 上代

3 時代特定の経緯と問題点

① 時代の調査

時代を調べるのに主として利用したのは次の辞典である。

古語

『福武古語辞典』初版 福武書店(前掲)

『高校基礎古語辞典』古田東朔監修 旺文社 一九八二年刊

現代語

『大辞林』第二版 三省堂(前掲)

『日本国語大辞典』第二版 小学館 二〇〇一年刊

(但し、Japanknowledge Personalによる)古語辞典はほとんどの見出し語に例文が載っているのに、古語についてはカードを作った段階で時代特定はできていた。国語辞典は、小・中型辞典では時代の分かる例文がほとんどない。小学館の『日本国語大辞典』は現代語にも例文を載せているが、全二十巻の紙の辞典で約

似て非なり

のように書くが、この辞典では

にる【似】

〓 させる

〓 た性質

のように、他の見出し語と形が同じになるように揃えた。親見出しが活用語であること、子見出しが子見出しであることを分かりやすくするためである。

(h) 親見出しと共通部分を持たない子見出しは、関連語として「▼」を以て示した。

(i) 子見出しに複数の意味がある場合、①②③…で区別し、それぞれに「―」を付けて意味の区別を記した上で類語を集めた。

(j) 子見出しに、常用漢字表外の漢字や音訓が使われた場合には、適宜振り仮名を二行割りの平仮名で示した。

三、類語

収録類語総数は、延べ約三十二万四千語。連語や句による表現は、それぞれひとまとまりで一語と数えている。

1 類語の配列

見出し語の後に、時代ごとに五十音順で単語をまず配列し、連語や句の形による表現がある場合には、その後に続けて五十音順で配列した。時代は、現代↓上代の順とした。

さらに枕詞や敬語、ことわざなどがある場合には、それぞれ《尊》《謙》《枕》《句》などの略号の後に、時代ごとに五十音順で配列した(略号については後記)。

三十万の単語を一つひとつ調べるのは、個人の仕事としては不可能と諦め、現代語については多くの語を「不明」のまま放置していた。現代語の調査を始めたのは、インターネットの『日本国語大辞典』が利用できるようなようになったからである。平成二十年代になつて「Japanknowledge」のサービスを利用するようになり、足踏みしていた作業が動き出した。

②時代の意味

例文が複数ある場合、最も古いものをその時代とした。その意味では、この辞典の表す時代は「この言葉はこの時代から使われ始めた」ということを表していると言える。しかし、初出が例文としてあがっているとは限らないし、とくに古語は小型辞典で調べたので初出は少ないと思われる。ゆえに、この辞典の時代表示は「少なくともその時代には使われていた」ということを表しているとしか言えない。それもおおよその推定に過ぎない。次の二書は同じ年に成立している。

『三教指帰』(759年成立)
『続日本紀』(794年成立)

ゆえに、ここに出てくる言葉は、時代区分で機械的に分けられ^①となる。しかし、四十巻の『続日本紀』は、平安時代が始まる前から数年(十数年?)かけて書かれたであろうことを考えると、^①とすることが実際に近いように思われる。典籍の成立年代そのものが推定ということもある。

時代は、おおよその目安に過ぎない。

③古語と現代語

辞典の大きな特色である。なお、再掲しているのは近代以前の語で、見出し語が現代語の場合、再掲していない。

【わたしもり】^{【中古】}かはもり「川守」。かはを「川長」。^{【上代】}わたしもり「渡守」。わたりもり「渡守」。

⑤時代特定ができない言葉

- (a)時代の分かれる例文がない。
- (b)ことわざや格言などで漢籍等の出典は分かっても、日本でどう使われたかの例文がない。
- (c)表現があいまいで時代が分らない。例えば、鳥の異名について、国語辞典では次のような説明がある。

つつなわせどり＝せきれの古名
かわらすすめ【川原雀】＝かわせみの和名
ももちどり【百千鳥】＝うぐいすの別名
とどめどり【禁鳥】＝うぐいすの異名
「別名」「異名」「和名」はどう使い分けているのか分らない。もちろん時代も分らない。
(d)語釈に「…に同じ」とよくある。例えば、次のように書いてある場合、意味だけが同じなのか、使われた時代も同じなのか、判断できない。
なみだがね【涙金】＝なみだきん【涙金】
まどわかす【惑】＝まどわす【惑】に同じ。

以上のような場合、原則として、(a)は現代、または削除。(b)(c)は近代、または削除。(d)は「…に同じ」とされた言葉の時代とした。特に(a)は、歳時記やことわざ辞典などから採集した言葉で、他の辞典では例文どころか見出し語にもなっていない言葉があつて、それらはすべて

「古語」とは、古典の言葉で現在その意味で使われていない言葉のことである。「雨」や「風」は、万葉の時代から使われているけれども「古語」とは言わない。

この辞典では、まず古語の時代を調べ、続いて現代語の時代を調べ、古語・現代語を区別せずに時代ごとに並べたため、類語の中に古語と現代語が混在している。例えば、次の例のように、「満足」という現代語が平安時代の言葉としていきなり出てくる。

じゅうぶん【十分】…^{【中古】}じゅうそく「充足」。じゅんなく「潤沢」。たんぬ足。まったし「全」。みちたる「たりる」満足。至れり尽くせり。^{【古語】}いっばい「一杯」。ことたる「たりる」事足。じふぶん「十分」。たらふ「足」。はかばか「果果」。まほ「真面」真秀。まんどく「満足」…

そのため、これらの類語を他の辞典で調べる場合、古語辞典で引くのか、国語辞典で引くのか、迷うこともあり得る。

④見出し語の時代

一般に、類語辞典で見出し語が類語の中に再掲されることはない。「渡し守」という言葉の類語に「渡し守」がある、などとは言わない。しかし、この辞典では見出し語を類語として再掲している。次のように「わたしもり【渡し守】」の項では、上代の言葉として「わたしもり【渡し守】」が記載されている。これは、「わたしもり【渡し守】」という見出し語の時代を示すものである。この再掲がなければ、その時代をすぐに知ることができない。見出し語の時代を改めて調べ直す手間を省いたもので、これもこの

4 類語の表記等

①清濁の異なりなど音韻上の変化や、省略、派生などによって、語形は異なるが、近似のものと考えられるときは、次のように「／」を挟んで併記した。

あだこと／あだこと「徒言／仇言」。
ミス／ミステーク(mistake)。

②類語の漢字表記は、類語と確定するのに用いた資料で採用されている表記を取り入れた。複数ある場合には「／」を挟んで併記した。それぞれ資料により、また用例により採用している漢字が異なることがあるため、同じ語でも、項目によって掲げている漢字表記が異なることがある。

③連語や句の形で取り上げている類語に常用漢字表外の漢字や音訓が使われているときには、適宜振り仮名を二行割りの平仮名で示した。近世以前の類語では振り仮名は歴史的仮名遣いで示している。また、部分的に表記が複数ある場合には、()内に異なる表記を示した。

腕うでに余る。
手車てぐるまに乗す「乗せる」。

④仮名遣いと用言の活用は、原則として次のように書き分けた。

現代Ⅱ 現代仮名遣い 口語の終止形
近代Ⅱ 歴史的仮名遣い 口語の終止形

(カタカナ語は現代仮名遣い)

近世以前Ⅱ 歴史的仮名遣い 文語の終止形
仮名遣いは原則通りにしたが、活用に関しては、辞典の例文に従ったため、近世や中世の語でも口語の活用になっている語もある。

⑤ 二段活用の文語の動詞を終止形で記載した場合、意味が分かりにくくなる。例えば、「痛める」の終止形は「痛む」である。「心が痛む」も「心を痛める」も「痛む」となる。「いたむ」「痛」だけではマ行五「四」段か、マ行下二段か区別がつかない。そこで、次の例の傍線部のように「」内に口語の一段活用を付記した。

くちろ【朽】… 中古 おとろふ「ろえる」[衰]。くつ
「朽」。上代 かるかるる「枯」。くつ「くちろ」[朽]。
くつ「崩」。くつ「さる」。

なお、その表記は次のようにした。

(a) 「」内は現代仮名遣いとした。一般の辞典で、比較のために書くとしたら、

おとろふ「ろへる」[衰]

すう「すえる」[据]

のように活用行を変えないだろうし、そのほうが形の変化が分かりやすいが、この辞典ではあえて、

おとろふ「ろえる」[衰]

すう「すえる」[据]

のように現代仮名遣いにした。この辞典は、収録され

(d) 「お・いる【老】」の項に「すっかり・いる」という子見出しがあり、その中に「ふりはつ」「旧果」「おいはつ」「老果」という動詞がある。

お・いる【老】…

すっかり・いる おいさらばえる【老】。近世 おいくつ

「くちろ」【老朽】。中世 おいさらばふ【老】。ふりは

つ【旧果】。上代 おいはつ「はてる」【老果】。

「ふりはつ」も下二段活用なので、「はてる」のように付記するところであるが、この語には一段化した用例がなく、現代語の辞書にも立項されていないので付記しない。このように、現代に残っていない語、あるいは現代に残っている見出し語と同様の意味では使われていない語には、口語の一段活用の形を示していない。

5 外来語

外来語はスペリングを付記した。但しローマ字のみ。

原語名は、英語は無表記、他はスペリングの前に二行割りの片仮名で付記した。近代以降に中国語や朝鮮語から入ってきた言葉には、(中国語)(朝鮮語)のように記し、漢字表記がある場合には、それも記した。梵語(Ⅱサン スクリット語)には「梵」と記した。

欧米語を組み合わせて作った外来語風の日本の言葉は「和製」として、次のように示した。

ハローワーク(和製 Hello Work)。

ている類語を国語辞典で調べることがあるので、その場合、国語辞典の仮名遣いのほうが都合だと考えたからである。例えば、前の例の「おとろふ」は古語辞典で調べるが、「おとろえる」は国語辞典で調べるので現代仮名遣いとした。

(b) 「」は二段活用の語と共通する部分を示し、表示を簡略化するために使った記号である。「」内の平仮名が5文字以上にならないように機械的に処理した。一般の辞典がこのようなことを書くとしたら、言葉の成り立ちを考えて、

につむ「つめる」[煮詰]
さまかふ「かえる」[様変]
おとろふ「おとろえる」[衰]
のように書き分けるのがふつうだが、この辞典は、

おとろふ「ろえる」[衰]
はつかしむ「しめる」[辱]

のように、言葉の文法的な切れ目は考えないで、他の言葉と形が同じになるように揃えた。「」によって語末3文字が目立ちやすいと考えたからである。フリーズの場合もこれに準じ、「」を使って語末を数文字に抑えた。

(c) 二段活用の語が四段にも活用する場合、四段活用の語には次のように注を付記した。

たえる【絶】… 中古 …ほろぶ「滅亡」[四段活用]。
めつばう「滅亡」やむ「止罷」。上代 …つゝ「きる」
「尽」。ほろぶ「ほろぶる」[滅亡]。

6 品詞

本来、類語の品詞は見出し語と合わせるべきである。特に子見出しの場合、例えば、

― する
― すること
― するさま

のような見出しであれば、それぞれ、動詞・名詞・形容詞など、その表現にあった品詞を揃えるべきである。しかし、

おそなえ【御供】…
― する 中世 えいぐ「影供」。へしん「供進」。中世 た
むく「たむける」[手向]。まひなふ「贈」…

のように、そうならない項もある。類語が少なくなくて分けられなかったということもあるが、同意語・類語だけでなく、関連語・周辺語を形にとられず幅広く集めようとした結果ということもある。

四、略号・記号

《尊》 尊敬語
《謙》 謙讓語
《丁》 丁寧語
《卑》 卑語
《枕》 枕詞(「」は掛かる言葉を示す)
《序》 序詞(一例のみ)
《句》 ことわざ、格言等
↓ 参照先の見出しを示す。

空見出しでなく、ある程度類語が集まっているのに「↓」で参照項を示しているのは、次のいずれかの場合である。

- (a) 参照先にはそれ以上に類語がある。
- (b) 意味のずれによって別の視点での類語が広がる。
- (c) 参照先の方に子見出しが多く、関連語をより多く見ることができる。

参照先に同音・同訓の語が多い、子見出しが多いなど、参照先を見つけにくい場合には、参照先の見出し語の漢字表記や子見出しなども示した。

五、参考文献

- 『福武古語辞典』井上宗雄ほか編 福武書店 一九八八年
- 『高校基礎古語辞典』古田東朔監修 旺文社 一九八二年
- 『角川古語大辞典』（全五巻）中村幸彦ほか編 角川書店 一九八一年
- 『大辞林』第二版 松村明編 三省堂 一九九五年
- 『日本国語大辞典』（全二十巻）小学館 日本大辞典刊行会編 一九七六年
- 『日本国語大辞典』第二版（全十四巻）小学館 二〇〇一年（但し、Japanknowledge Personal only）
- 『大言海』大槻文彦著 富山房 一九二五年
- 『大日本国語辞典』上田万年著 富山房 一九四〇年
- 『現代語から古語を引く辞典』芹生公男編 三省堂 二〇〇七年
- 『日本類語大辞典』志田義秀ほか編 講談社 一九七四年
- 『デジタル類語辞典』第七版 株式会社ジャングル

- 『類語大辞典』三刷 柴田武ほか編 講談社 二〇〇二年
- 『類語選びの辞典』新装版 武部良明編 三省堂 二〇〇一年
- 『類語辞典』広田栄太郎ほか編 東京堂出版 一九七四年
- 『類語連想辞典』米谷春彦編 ぎょうせい 二〇〇四年
- 『角川類語新辞典』四刷 浜西正人著 角川書店 一九八一年
- 『大歳時記』大岡信ほか編 集英社 一九八九年
- 『俳句歳時記』飯田蛇笏ほか編 平凡社 一九七〇年
- 『植物表現辞典 歳時記版』大野信監修 遊子館 二〇〇二年
- 『動物表現辞典 歳時記版』大野信監修 遊子館 二〇〇二年
- 『例解 短歌用語辞典』窪田空穂ほか編 創拓社 一九九〇年
- 『ことわざ辞典』長谷川鑛平ほか編 高橋書店 一九九一年
- 『暮らしの中のことわざ辞典』折井英治編 集英社 一九八八年

本辞典には現代では不適切と思われる用語や表現がありますが、資料引用という観点から、そのままに掲載しています。

あ

ああ〔嗚呼〕あ。おお。近代 あらまあ。ありや
りや。あれえ。おやまあ。近世 ありやありや。
おや。おやおや。中世 ああ。あつぱれ。天
晴。ありや。あれ。はれ。まこと。真
誠。やれやれ。中古 あなや。あはれ。あ
ら。あらあら。いで。いでや。や。上代 あ
あ〔嗚呼。噫〕。あな。あなに。はしきやし。
はしきよし。はしけやし。はら。やあ。↓
かんと〔感動〕

アース(earth) せち〔接地〕。ちらく〔地絡〕。
アーチ(arch) せりもち〔拱持〕。

― 状の構造を支える部材 リブ(rib)。

アーチエリー(archery) ようきゅう〔洋弓〕。

アート(art) げじゅつ〔芸術〕。びじゅつ〔美術〕。

アーモンド(almond) はたんきょう〔巴丹杏〕。
へんろ〔扁桃〕。

あい〔愛〕 アムール(=amour)。エロス(=Eros)。

近代 ラブ(love)。中世 あいちょう
〔愛寵〕。おんあい〔恩愛〕。こころよし
〔志〕。中古 あいこ〔愛顧〕。あはれ憐。

おもひ〔思〕。じあこ〔慈愛〕。ちよう寵。
ちようあい〔寵愛〕。上代 あい〔愛〕。じんあ
い〔仁愛〕。― あい・する。― こい・する

― が冷める 中世 秋の契り。中古 あきかぜ
〔秋風〕。すみはなる〔住離〕。とこはなる〔床
離〕。とだえ〔途絶〕。よがれ〔夜離〕。よよ

〔世世〕。秋風が立つ。上代 おもひすぐ〔思
過〕。

あ

― が募る 中古 こりつむ〔憔悴〕。
― に溺れる 中古 まどふ〔惑〕。上代 さどふ

〔惑〕。たはる〔戯〕。

― に染まる 中世 あいぜん〔愛染〕。

― の手紙 中いぶみ

― の場面 近代 ラブシーン(love scene)。

― の深さのたとえ 近世 屋烏の愛。中世

枝を進め一連なる。中古 しょうら〔松
蘿〕。枝を交はす。

― のふれあい 近代 ネッキング(necking)。

― を誓う 中古 ちぎる〔契〕。

― を貫き通すこと 近世 しんぢゅうだて〔心中
立〕。しんぢゅうづく〔心中尽〕。

― を寄せる 中世 たいせつ〔大切〕。中古 ここ
ろよせ〔心寄〕。

異性間の― 近代 らんあい〔恋愛〕。上代 こひ

〔恋〕。― あいする。― こいする

神の― アガペー(=agape)。せいちょう〔聖
寵〕。中古 おんちよう〔恩寵〕。

この上ない― 中世 しあい〔至愛〕。

子への― 近世 こぼんなう〔子煩惱〕。

私心を離れた純粋な― 近代 むがあい〔無我
愛〕。

邪心のないひたむきな― 近代 じゅんあい〔純
愛〕。

精神的な― 近代 プラトニックラブ(Platonic
love)。

性的な― エロス(=Eros)。近代 せいあい

〔性愛〕。にくよく〔肉欲〕。

妻の― 中古 ないちよう〔内寵〕。

同性間の― 近代 どうせいあい〔同性愛〕。

友の― 近代 いっじやう〔友情〕。中世 いっあ
い〔友愛〕。

憎しみと― 中古 ぞうあい〔憎愛〕。上代 あい
ぞう〔愛憎〕。

母の― 近代 ばせいあい〔母性愛〕。

ひそかな― 近世 しあい〔私愛〕。

夫婦の― じようあい〔情愛〕。近代 きんしつ
さうわ〔琴瑟相和〕。中世 さうふれん〔想夫
恋〕。想夫憐。相府蓮。

身近な人への― りんじんあい〔隣人愛〕。

最も― していること 中古 さいあい〔最愛〕。

あい〔藍〕 ほんあい〔本藍〕。中古 たであみ〔蓼
藍〕。上代 ある〔藍〕。

― で染めること 中世 こうかき／こんかき〔紺
掻〕。中古 あぞめ〔藍染〕。

あいろ〔藍色〕 近代 らんしよく〔藍色〕。

中世 かちいろ／かちんいろ〔褐色〕。中古 か
ち〔褐〕。からある〔韓藍〕。

鮮やかな― プルシアンブルー(Prussian
blue)。近世 せいらん〔靑藍〕。上代 こんじや
う〔紺青。金青〕。

薄い― 近世 かめのぞき〔瓶覗〕。のぞきいろ

〔覗色〕。中世 うすはないろ〔薄花色〕。は
ないろ〔花色〕。はなだいろ〔縹色〕。中古 あ
をにび／あををぶ〔青鈍〕。そらいろ〔空色〕。

上代 みはなだ〔水縹〕。

くすんだ― 近代 おなんど／おなんどいろ〔御
納戸色〕。近世 なんどいろ〔納戸色〕。

濃い― 近代 ブルーブラック(blue black)。

近世 こん紺。こんいろ〔紺色〕。中世 こあ
る濃藍。

あいうち〔相打〕 近世 あひうち〔相打／相討〕。

あひこ。中世 かわけ引分。

あいか〔哀歌〕 近代 エレジー(=elegy)。中世 あ
いか〔哀歌〕。中古 あいしやうか〔哀傷歌〕。

【上代】ばんか「挽歌」。ひか「悲歌」。

【あいかわらず】「相変」。依然として。今まで通り。変わらなく。【近代】なほかつ「猶且」。やはり。旧態依然として。従前通り。【近世】相も変はらず。【中世】あひかはらず「相変」。

【中世】なほ尚「猶」。

【あいかん】「哀願」。ひきこも「悲喜交々」。

【近世】あいくわん「哀歎」。【中世】どあいらく「喜怒哀楽」。ひき「悲喜」。

【あいかん】「哀願」。袖に縋る。泣きを入れる。

【近代】あいくわん「哀願」。あいくわん「哀訴」。

【中世】あいくわん「哀願」。あいくわん「哀訴」。

【中世】あいくわん「哀願」。あいくわん「哀訴」。

【中世】あいくわん「哀願」。あいくわん「哀訴」。

【中世】あいくわん「哀願」。あいくわん「哀訴」。

【中世】あいくわん「哀願」。あいくわん「哀訴」。

【中世】あいくわん「哀願」。あいくわん「哀訴」。

【中世】あいくわん「哀願」。あいくわん「哀訴」。

【中世】あいくわん「哀願」。あいくわん「哀訴」。

【中世】あいくわん「哀願」。あいくわん「哀訴」。

にくし「気憎」。すくすくし「すくすくし」すくすくし「直直」。すくすく「健」。すげなし「素気無」。そばそば「稜稜」。れいたん「」。

「がななきま」【近世】けんけん。つんつん。

「にぞしく生真面目なま」【中世】すくすくや／すくすく「健」。

【愛顧】。おん「恩顧」。

【愛顧】。おん「恩顧」。

【愛顧】。おん「恩顧」。

【愛顧】。おん「恩顧」。

【愛顧】。おん「恩顧」。

【愛顧】。おん「恩顧」。

【愛顧】。おん「恩顧」。

【愛顧】。おん「恩顧」。

【愛顧】。おん「恩顧」。

【愛顧】。おん「恩顧」。

【愛顧】。おん「恩顧」。

【愛顧】。おん「恩顧」。

【愛顧】。おん「恩顧」。

好「ようこそ」。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

年賀のー「ねんが」。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

【近代】ウェルカム(welcome)。グッドモーニング(good morning)。グッドナイト(good night)。ハロー(hello)。ボンジュール(bonjour)。ボンソワール(bonsoir)。

あ

ーである女 かのじよ「彼女」。

【近代】いろをん

【志】。【中世】おもひ「思」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【愛情】。こひ恋。ーじよ「情」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【色女】。じやうふ情婦。をんな「女」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

【目配】。【中世】くはす「食」。

—する夫 上代 いとこせ「愛子夫」。↓おつと

—する気持ち 近世 じゃうあい「情愛」。

中古 あいねん「愛念」。上代 あいじやう「愛情」。

—する妻 上代 いとこめ「愛子女」。↓つま

—する人 上代 いじん「こいびと

異性を—する 上代 こふ「恋」。つまこひ「妻恋／夫恋」。

国を—する 近代 あいこく「愛国」。

故郷を—する 近代 あいきやう「愛郷」。

心から—する 近代 ねつあい「熱愛」。

すべてを—する 近世 いっしどうじん

「視同仁」。どうじん「同仁」。中古 はくあい「博愛」。

上代 はんあい「汎愛」。

ひろく—する 中古 はくあい「博愛」。

深く—する 近代 あいぶ「愛撫」。せつあい

「切愛」。ぜつあい「絶愛」。中世 しんあい「深愛」。ちゅうあい「忠愛」。中古 しようあい「鍾愛」。

▼接頭語 中古 まな。

あいせき「相席」どうせき「同席」。近世 あひきやく「相客」。中古 どうぎ「同座」。

あいせき「哀惜」近代 あいせつ「哀切」。近世 あいせき「哀惜」。いたむ「悼」。中世 あいたう「哀悼」。ついたう「追悼」。ついてう「追弔」。つうしゃく／つうせき「痛惜」。上代 あいしやう「哀傷」。

あいせき「愛惜」近代 あいやく「愛着」。みれん「未練」。近世 あいかう「愛好」。あいせき「愛惜」。中世 あいじやく「愛惜」。中古 をしむ惜」。

あいそ「愛想」近世 あい「愛」。にべ「鰐膠」。

中世 あいさう／あいそ「愛想」。↓あいきょう

—がない(さま) ↓ぶあいそう

—がよい 近代 如才じさいない。近世 しなつらし

—笑い あいきょうわらい「愛嬌笑」。近世 せじわらい「世辞笑」。てんせう「諷笑」。近世 ついしやうわらい「追従笑」。

—を尽かす あきはてはてる「采果」。近世 あいそつかし「愛想尽」。愛想を尽かす。中古 おもひはなつ「思放」。おもひはなる「思離」。みはなす「見放」。

あいだ「間」かん「間」。かんかく「間隔」。かんげき「間隙」。きかん「期間」。ちゅうかん「中間」。ま間。近世 まあひ「間合」。中世 あひま「合間」。くうげき「空隙」。中古 あはひ

／あひ間。すきま「透間」隙間。たえま「絶間」。ちゅうげん「中間」。なかあひ「中間」。はさま／はさま狭間。ひま「暇」。ひまひま「隙隙／暇暇」。へだたり「隔」。

上代 あひだ「間」。はし「端」。ほど「程」。ま間。

—が大きい 中古 まどほ／まどほし「間遠」。

—が透いている 近代 がらあき「空」。そ疎。中世 あひどほ「相遠」。中古 まどほ「間遠」。

—がない 近代 ちよくせつ「直接」。中古 そのまま「其儘」。ところなし「所無」。上げず

—で双方の悪口を言う 近代 なかくち「中口」。上代 なかと「中言」。

—にある 近代 かいさい「介在」。かいりふ「介立」。中世 かいりつ「介立」。

—をとりとつこと 近世 なかで「中手」。はしわたし「橋渡」。中世 ちゅうにん「仲人」。

ひきつく／—うける「引受」。中古 あひしらふ／あへしらふ。

—によつて態度が変わる《句》 近代 鬼にも

なれば仏にもなる。三舎を避く。人々を見て法を説け。人我に幸ければ我また人に幸し。近世 魚心あれば水心。鐘も撞木つづみの

当たりやう。

—に利益を与える りてき「利敵」。近代 敵に塩を送る。花を持たせる。近世 敵の意のまま 近世 にんい「任意」。狙上すうじやうの魚。狙板すうばんの行く。中世 きよにく「魚肉」。

—のいる場所に行く 近世 となりこむ「怒鳴込」。ふこむ「踏込」。

—の機嫌を取る 近世 げいがふ「迎合」。てん

とり「点取」。鼻息はないきを仰ぐ「窺のぞみあふ」。

—のためにしたように言う 近世 恩に掛く「掛け」。中世 恩に着せる。

—の出力を待つ 近代 だしん「打診」。近世 にらみあひ「睨合」。中古 腹を探る。

困暮の— 中世 ごがたき「暮敵」。

恨みに思う 近代 きうてき「仇敵」。中世 あたかたき「仇敵」。かたき「敵／仇」。しうてき「讐敵」。

恋しく思う ↓こいびと

試合などの— 近代 たいしゆ「對手」。てき

「敵手」。かつかき「好敵手」。てきしゆ「敵手」。ひつちう「匹敵」。

商売の— 近世 あきなひぐち「商口」。うりくち「売口」。

手強い— なんてき「難敵」。近世 きやうてき「強敵」。中世 がつてき「強敵」剛敵／豪敵。二人で物を担ぐとき— 近世 あひかた「相肩」。あひばう「相棒」。

上代 なかだち「仲立」。

—を隔てる 中世 あひだむ「間」。あらける

「粗」。ひきはなす「引離」。上代 へだつ「へだてる」。「隔」。わく／わける「分」。

▲…の問ずつとの意の接尾語 中古 すがら。あいたいりつ「対立」。面と向かふ「対置」。

近世 たいりつ「対立」。面と向かふ「対置」。

うたい「相對」。たいたう「対当」。むかひあふ「同合」。むきあふ「向合」。中古 あひたいす「相對」。あふ「逢」。

あいたがら「間柄」近代 くわんけい「關係」。

近世 あひだから「間柄」。つづきあひ「続合」。

続間。なかあひ「中間」。中古 あはひ「間」。あひだ「間」。なか「仲」。なからひ「中」。

親子夫婦などの— 近代 えん「縁」。↓かんけい「關係」

ちやうと会つた程度の— 近代 はんめんしき「平面識」。

仲のよい— 近代 あひなな「相仲」。

長屋に住む者同士の— 近世 あひながや「相長屋」。

あいちやく「愛着」しやうちやく「執着」。近代 あいちやく「愛着」。あいよう「愛用」。近世 あいかう「愛好」。いとほしむ「愛」。心を留む／留める。中世 あいしふ「愛執」。あいちやく「愛着／愛着」。おぼしめる「思寄」。おぼし「思」。しふし「執心」。中世 あいじやく「愛惜」。こつづき「心付」。しふぢやく「執着」。上代 うるはし「麗」。

—を捨て去ること 中世 かつあい「割愛」。

激しい— 近代 かつあい「渴愛」。

あいつ「彼奴」近世 あいつ「彼奴」。きやつ「彼奴」。

よい— 近世 かうてきしゆ「好敵手」。てあひ「手合」。

アイディア(idea) あん「案」。かんがえ考」。はつそう「発想」。近代 アイディア。かうあん「考案」。さうあん「創案」。ちやくさう「着想」。はつし「発意」。ひらめき「閃」。めいあん「名案」。近世 おもつき「思付」。さうい「創意」。めうあん「妙案」。めうけい「妙計」。めうさく「妙策」。中世 くふう「工夫」。ちやくがん「着眼／著眼」。中世 あん「案」。

—をよく出す人 アイディアマン(idea man)。

あいて「いる(空)」近代 がらあき「空」。

—いる時間 すき「隙」。中古 すきま「隙間」透間。

—いる所 くうかん「空間」。近世 あきしよ「空所／明所」。中世 あきと「あきところ」明所／空所。くうしよ／くうじよ「空所／空处」。↓あきち

間隔が—いる 中世 あひどほ「間遠」。中古 まどほ「間遠」。

あいつ「哀悼」近世 あいせき「哀惜」。中世 あいたう「哀悼」。しうしやう「愁傷」。

—歌 近代 エレジー(elegy)。中世 あいか「哀歌」。中世 あいしやうか「哀傷歌」。上代 ばんか「挽歌」。ひか「悲歌」。

あいなめ「鮎魚女」近世 あいなめ「鮎魚女」。あぶらめ「油女」。中世 あぶらこ「油子」。

あいにく「生憎」近世 間が悪い。中世 あいにく「生憎」。びんあし「便惡」。中古 あやにく「生憎／可憎」。あやにくし「生憎」。びんあし「便無」。をりあし「折惡」。—なことになる 中古 あやにくたつ「生憎」。

—と自分 上代 ひが「彼我」。

—にしない 近代 せうさつ「笑殺」。背を向ける。取り合わない。漢かんもひつけない。

横を向く 近世 あいそつかし「愛想尽」。おあひだ御間。そっちのけ「其方退」。つきはなす「突放」。中世 けんもはうろ。もてはなる「難」。中古 しはなつ「差放」。

—にこする 向こうにまわす。胸を貸す。近代 おあひ「御相」。かまひつける「構付」。たいしゆ「對手」。近世 あひてどる「相手取」。であふ「出合」。中世 おうせつ「応接」。おうたい「応対」。とりあふ「取合」。

あいて「相手」むこうがわ「向側」。近代 せんばう「先方」。たいてき「対敵」。ライバル(rival)。近世 あひ「相」。あひかた「相手」。

中世 あひて「相手」。てきじん「敵人」。中古 かたき敵。上代 もこ「媚」。

—構わず 近世 だれかれなしに。

—として恐れるにたらない 中世 くみしやすし「与易」。

—と自分 上代 ひが「彼我」。

—にしない 近代 せうさつ「笑殺」。背を向ける。取り合わない。漢かんもひつけない。

横を向く 近世 あいそつかし「愛想尽」。おあひだ御間。そっちのけ「其方退」。つきはなす「突放」。中世 けんもはうろ。もてはなる「難」。中古 しはなつ「差放」。

—にこする 向こうにまわす。胸を貸す。近代 おあひ「御相」。かまひつける「構付」。たいしゆ「對手」。近世 あひてどる「相手取」。であふ「出合」。中世 おうせつ「応接」。おうたい「応対」。とりあふ「取合」。

あいのり【相乗】^{近代}あひのり「相乗」。びんじょう「便乗」。^{近代}あひひかご「相合駕籠」。あひかご「相駕籠」。あひこ「相乗」。

アイバンク(eye bank) かまくぎんこう「角膜銀行」。がんきゅうぎんこう「眼球銀行」。

あいはんする【相反】^{近代}あいはんする「相反」。はいはん「背反」。^{中世}はいち「背馳」。―する感情が同時に存在すること。アンビバレンス(ambivalence)。りようかせに「両価性」。りようめんかち「両面価値」。

あいびき【逢引】^{近代}デート(date)。ランデブー(rendez-vous)。^{近代}あいびき「逢引」。しひあひ「交合」。^{中古}あふせ「逢瀬」。

あいほう【相棒】^{近代}あてに相手。ざつりよう「同僚」。^{近代}コンビ(combination)の略。パートナー(partner)。半肩(半)を担ぐ。^{近代}あひかた「相方」。あひぼう「相棒」。ぐる。^{中世}あひどり「相取」。つれ「連」。―なかま。

《句》^{近代}一本の薪は燃えぬ。片手で鉋は揉めぬ。孤掌を鳴り難し。単糸線を成さず。

物を担ぐときの―^{近代}あひかた「相肩」。

あいま【合間】^{近代}インターバル(interval)。^{近代}かたま「片時間」。^{中世}あひま「合間」。^{中古}たま「絶間」。

あいまい【曖昧】^{近代}フアジー(fuzzy)。ふめいろ「不明朗」。煮え切らない。^{近代}いゝ依違。ふめいろ「不明瞭」。^{近代}あやふや。うやむや「有耶無耶」。どじぐじ。どちつかず「何方付」。ばかす「暈」。言を左右に

する。^{中世}ふめい「不明」。筑羅(ろ)が沖。^{中古}あいまい「曖昧」。おぼおぼし。おぼつかなし「寛束無」。ころもとなし「心許無」。たどたどし。^{上代}おほほし「おほほし」。

―でないさま。―あきらか。―はつきり。あいよう【愛用】^{近代}あいよう「愛用」。^{近代}あいかう「愛好」。^{中世}しゅうたく「手沢」。^{中古}つかひつく「―つける」。「使付」。

―している機械など。あいき「愛機」。

あいよく【愛欲】^{近代}エロチシズム(eroticism)。中古あいき「愛執」。あまいく「愛欲」。よくかん「欲海」。よくしん「欲心」。

あいらしい【愛】^{近代}かわいらしい「可愛」。愛嬌がある。^{近代}かはゆい。めこい。^{近代}せかれし「可憐」。^{中世}あいらしい「愛」。^{中古}うつくし。「かわい」。―。

あいろ【隘路】^{近代}なんかん「難関」。^{近代}あいろ「隘路」。ネック(neck)。ボトルネック(bottleneck)。^{近代}ししやう「支障」。^{中世}しやうが「障害」。

アイロン(iron) スチームアイロン(steam iron)。でんきアイロン「電気iron」。^{中世}ひの「火熨斗」。

―台。まんじゅう「饅頭」。

―をかけること。^{近代}プレス(Press)。

―をかけること。当てる布。あてぬの「当布」。

あう【会】^{近代}あひあひ「顔合」。^{近代}しやうけん「相見」。^{近代}めんせつ「面接」。^{近代}げんげん「げんもじ」。「御見文字」。

さうぐう「遭遇」。めんくわい「面会」。^{中世}あひあひ「相会」。

しやうかん「相看」。であふ「出合」。

あひあひ「相見」。あふ「出逢」。あり

―台。まんじゅう「饅頭」。

―をかけること。当てる布。あてぬの「当布」。

あう【会】^{近代}あひあひ「顔合」。^{近代}しやうけん「相見」。^{近代}めんせつ「面接」。^{近代}げんげん「げんもじ」。「御見文字」。

さうぐう「遭遇」。めんくわい「面会」。^{中世}あひあひ「相会」。

しやうかん「相看」。であふ「出合」。

あひあひ「相見」。あふ「出逢」。あり

―台。まんじゅう「饅頭」。

あふ【在合】。いきあふ「行逢」。いであふ「出逢」。

くわいす「会」。たいめ「対面」。まかりあふ「罷逢」。

みゆ「みえる」。「見」。

みる「見る」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

みえ「みえる」。「見」。

「蒼浪」滄浪。――い松 近代せいしょう「青松」。中古すいしょう翠松。――い瑠璃 中古へきるり「碧瑠璃」。――く生い茂った草 近代せいさう「青草」。中古りよくぶ「緑蕪」。――く草木が生い茂ったさま 中古さうさう「蒼蒼」。――く澄んだ色のだとえ 中古へきるり「碧瑠璃」。――くなる ↓あおさめる
――く広い海 中世さうめいかい「滄溟海／蒼溟海」。上代さうめい「滄溟／蒼溟」。青々としたさま 近代せいせい「青青」。中古あをや「青」。
あおうみがめ「青海亀」うみぼうず「海坊主」。近代しやうがくばう「正覚坊」。をしやういををしやうを「和尚魚」。
あおぎみる「仰見」中世ぎやうし「仰視」。ぎやうばう「仰望」。せんぎやう「瞻仰」。中古うちあぐ「打上」。さしあふく「差仰」。せんが「瞻仰」。みあぐ「あける」「見上」。上代あおぎみる「仰見」。あふく「仰」。せんばう「瞻望」。ふりさく「振放」。――みて慕うこと 中古きんぎやう「欽仰」。――みるものたえ 近世さんと「山斗」。多くの人が「みる」中世ぐせん「具瞻」。しもうく「衆目」。
遠くをーみる 中世ふりさけあふく「振放仰」。上代ふりさける「振放見」。
あおぎり「梧桐」中世へき「碧梧」。中古あやぎり「上桐」。さう「蒼梧」。じやう「青桐」。上代じやう「梧桐」。

――の葉 近代ぐえふ「梧葉」。あおく「扇」中世あふつ「煽」。中古うちはす「団扇」。上代あふく「扇」。むやみにーぐ 中世あふきたつ「たてる」「扇立」。あおく「仰」↓あおぎみる
あおさめる「青」近代あをつばい「青」。さうぜん「蒼然」。さうはく「蒼白」。近世あをすむ「青」。中世あをさむ「さめる」「青」。あをじろし「青白」。あをびる「青」。(顔の色を失ふ。中世あをさむ「青」。あをむ「青」。
あおじやしん「青写真」あおやき「青焼」。近代ブループリント(Blueprint)。あおぞら「青空」近代さうくう「蒼空」。近世あをそら「あをぞら」「青空」。あをてんじやう「青天井」。中世碧羅の天。中古さうかう「蒼昊」。さきぎゅう「蒼穹」。せいてん「青天」。せいてん「晴天」。へきせう「碧霄」。へきらく「碧落」。空の海。上代あをくもあをくも「青雲」。さうてん「蒼天」。せいうん「青雲」。へきくう「碧空」。へきてん「碧天」。雲の切れ目のー 中古はれま「晴間」。
あおだいしやう「青大将」ねずみとり「鼠捕」。近世あをだいしやう「青大将」。おなびそ。
あおたがり「青田刈」あおがり「青刈」。あおたがい「青田買」。あおたばいばい「青田売買」。をして飼料とするもの あおがりしりやう「青刈飼料」。あおがらだいず「青刈大豆」。あおたけ「青竹」中世なまだけ「生竹」。中古あをたけ「青竹」。しんちく「新竹」。すいち

く「翠竹」。わかたけ「若竹」。――の簾 近世あをすだれ「青簾」。あおにさい「青二才」近代くわうこうじ「黄口児」。白面の書生。近世あをにさい「青二才」。にゅうしうじ「乳臭児」。上代じゅうし「豎子／孺子」。あおは「青葉」近代みどりば「緑葉」。中古りよくえふ「緑葉」。上代あをば「青葉」。《枕》中世みつとり「水鳥」。――にふりそそぐ雨りよくう「緑雨」。近代すいう翠雨。――の茂った木 中古りよくじゆ「緑樹」。――の下日陰 中古りよくいん「緑陰／緑蔭」。――の中の輪の花 近代いつてんこう「一点紅」。――を吹き渡る風 近世あをあらし「青嵐」。中古せいらん「青嵐」。あおひょうたん「青瓢箪」近世あをひさこ「青瓢」。あをふくへ「青瓢／青瓠」。あをべうたん「青瓢簞」。あおみどろ「青味泥」近世あをみどろ「青味泥」。中世あをみどろ「青味泥」。上代みしぶ「水泥」。あおむけ「仰向」近世あふのけさ「仰様」。あふむけ「仰向」。のけに「仰」。中世あふのけ「仰」。のけに「仰」。――にする 中世あふのく「仰」。あふむく「仰向」。――になる 近世あふむく「仰向」。中世のけぞる「仰反」。のけに「仰」。中世のけさ「仰様」。上代あふく「仰」。あおも「青物」近代あをさかな「青魚」。中世あをもの「青物」。やさい「野菜」。中古

くさば「草片／茸」。あおる「煽」たきつける「焚付」。近代アジェーシム(agitation)。アジる。せんと「扇動」。いば「挑発」。近世おだつ「おだてる」。「煽」。しゃへる。そそる。中世けしかく「かける」。「煽」。中古あふつ「煽」。あふる「煽」。そそのかす「唆」。風がーる 近世あふち「煽」。激しくーる 近世あふりたつ「たてる」「煽立」。そそりたつ「たてる」「立」。中世すかす「賺」。そそりあへ「あげる」「上」。あか「赤」ーあかい。――と青 近世たんべき「丹碧」。中古たんせい「丹青」。――と白 中世はく「紅白」。――味がかった褐色 近代しやしよく「赭色」。近世せきかつしよく「赤褐色」。――味がかった鼠色 近世ぶだうねずみ「葡萄鼠」。――味が感じられるさま ぼうつと。ほうと。――一味を帯びているので 上代あからけみ「赤」。一味を帯びる 中世あかばむ「赤」。上代あから「赤」。あからけし「赤」。あからぶ「あからむ」「赤」。いろう「色付」。黄味を帯びたー コーラル(coral)。近世あらひしめ「あらひじゆ洗米」。黒味を帯びたー 近代あんせきしよく「暗赤色」。えびちや「葡萄茶」。近世あづきいろ「小豆色」。中世しおいろ「渋色」。しぶがみいろ「渋紙色」。しやうじやうひ「猩猩緋」。どうしよく「銅色」。純粋なー まあか「真赤」。中古ひたくれなあ「直紅」。みなくれなあ「皆紅」。

茶色味がかったー あかちやいろ「赤茶色」。中世さびいろ「錆色」。葡萄のようなー ぶどういろ「葡萄色」。ワインカラー(wine color)。ワインレッド(wine red)。紫がかったー 近代パープル(purple)。ばたいろ「牡丹色」。中古あかね茜。桃の花に似たー 中世もいろ「桃色」。あか「垢」近代をこう「汚垢」。中古くそ「糞」。上代あか「垢」。――だらけの顔 近代こうめん「垢面」。――と汗 近代こぢ「垢膩」。――と脂 中古こぢ「垢膩」。――まみれになる あかじみる「垢染」。中世あかじむ「垢染」。――を落とすこと 道具 中古あかすり「垢擦」。頭のー ぶけ「頭垢／雲脂」。中古いろ「鱗」。襟についたー 近世えりあか「襟垢」。爪の間のー 近世爪の垢。中世つめくそ「爪黄」。手のー 近世てあか「手垢」。人や衣服のー 近世ひとあか「人垢」。水に生ずるー 近世みあか／みづあか「水垢」。中世みさび「水錆」。みしぶ「水洗」。みづけ「水苔」。耳の穴にたまるー じこう「耳垢」。みみあか「耳垢」。みみくそ「耳糞」。あか「関伽」中古あか「関伽」。あかみづ「関伽水」。かうすい「香水」。――の水を墓に注ぐこと 中古くわんちやう「灌頂」。あかい「赤」近代けこうしよく「血紅色」。たんこう「丹紅」。レッド(red)。近世けつしよ

く「血色」。しめ「朱」。しめいろ「朱色」。せきしよく「赤色」。べにいろ「紅色」。中世あかし「赤」。中古あか「赤／紅／朱」。あかに「赤丹」。あからか「赤」。おもひのいろ「思色」。にいろ「丹色」。ひ「緋」。ひいろ／ひしよく「緋色」。ますほ／まさほ「朱緒」。上代あからけし「赤」。あけ「赤／朱・緋」。さに／に丹。まさほのいろ「真緒色」。――い顔 近代しめがん「朱顔」。近世あかつら「赤面」。あからがほ「赤顔」。しやがん「赭顔」。――い敵役の顔 近世あかつら「赤面」。あかぬり「赤塗」。――い髪 近世こうもう「紅毛」。――い土ーあかつち。――く輝くさま 中古あからか「赤」。――くする 中古あかむ「あかめる」「赤」。上代あからむ「あかめる」「赤」。――くなる 近世あかばる「赤張」。中古あかむ「赤」。上代あかる「赤」。顔をーくする 近代紅をさす。近世あからむあかめる「赤」。中世きたん「愧赧」。こうとう「紅潮」。中古あかむ「あかめる」「赤」。おもほてる「面火照／面熱」。酒で顔がーくなること 近世さかやけ「酒焼」。上代あかにのほ「赤丹秀」。鮭の肉のようないーい色 サーモンピンクはねすの花のようないーい色 上代はねす／はねすいろ「唐棣色」。目立ってーい(色) 近世まっか／まっかい「真赤」。上代くれなあいろ「紅色」。にのほ「丹穂」。

『明』明。近世あかるし『明』。中世かうぜん
 『明然』。けいぜん『炯然』。しろし『白』
 『然』はれやか『晴』。はがらか『朗』。中世あかあ
 か『明明』。あきらか『明』。あきらけし
 『明』。かうかう『耿耿』。かうかう『皓皓』
 皎皎。けうけう『皎皎』。さやか『清』『明』。
 『上代』あがし『明』。はなやか『華』。
 『枕』『上代』あがし『吾心』『明明石』。おま
 ちう『居待月』『明明石』。
 ーいことと暗いこと 中世めいあん『暗滅』。
 めいめい『明滅』。
 ーいたとえ 昼間を欺く。近世昼を欺く。
 ーく 中世うららに『麗』。
 ーく 清いさま 近代りうりう『瀏瀏』『嚶嚶』。
 ーくする 上代 あかす『明』。あきらむ『一ら
 める』『明』。
 ーくなる あらむ『明』。からり。近世あか
 るむ『明』。中世あかる『明』。しらむ『白』。
 『上代』あかくける『明』。
 心がーさを失う 近代こむ『偏』。
 心をーくする 上代 あきらむあきらめる『明』。
 性格がーい かり。ねあか。近代くわいは
 つ『快発』。めいちゃう『明暢』『明晷』。めい
 いう『明朗』。活世やつき『陽気』。中世くわ
 いくつ『快活』。
 月などがーいさま 中世ほかから『朗』。
 灯火などをーくする 中世 かきあぐーあげ
 る『掻上』。かきたつ『一たてる』『掻立』。
 『中世』かかくかく『掲』。
 光のさすーいとける 近世あかるみ『明』。
 『中世』あかりさき『明先』。
 ぼんやりとーい 中世ろうろう『朧朧』。
 闇でも見える花のーさ 近代はなあかり『花

地。アヘン臭。泥臭。やば野暮。
 ーする。近世しやれる。洒落。洪が抜く。ー
 抜ける。洪皮が剝く。剝ける。洪気が
 抜く。抜ける。
 あかまつ【赤松】近世あかまつ「赤松」。中世
 めま「女松」雌松。をんなまつ「女松」。
 あかみ【赤味】ーあか【赤】
 あかめがしわ「赤芽柏」あかめ「赤芽」。あか
 がしわ「赤柏」。近世あかめしは「赤柏」。
 あかめがしは「赤芽柏」。こさいは「御葉
 葉」。上代ひさぎ「楸」。
 あがめる【祟】近世あがまふ「祟」。たつとぶ
 【尊】。中世つさやう「崇敬」。上代あがむ
 「あがめる」【祟】。うやまふ「敬」。かたつ
 【祟】。たふとぶ「たふとむ」【尊】。
 ーめて奉る。上代まつる「祭」【祀】。
 あからさま あからか【明】。近世せきらら「赤
 裸裸」。近世あからさま。むきたし「剥出」。
 中古めいはく「明白」。ろく「露骨」。
 ーにあるありと。近世あけすけ。あらはに
 【露】。さしつけて「差付」。中世ありてい【有
 体】。ちうちう【白】。
 ーにする。近世あはきたてる「暴立」。すっぱ
 らく「素破抜」。あぐりだす「扶出」。近世し
 るく「しるける」【白】。しらばけ「白化」。
 中古ひきつ「引出」。
 ーになる。近代ろてい「露呈」。近世しらへ
 らる【白】。
 あかり【明】けこうとつ「蛍光灯」。近代アー
 クライト(arc light)。アセチレン(acetylene
 灯)「けこう」繁灯。シャンデリア
 (chandelier)「しやんわ」燭光。でん
 とつ「電灯」。やうとつ「洋灯」。ライト